

# 自分の行動に見通しを持ち、最後まで やり抜く喜びを持つ生徒をめざして

田村 洋子

はじめに

M男は、本校中学部より6名のクラスメートとともに連絡入学してきた。お互いの行動特性や考え方も分かっている学級の中では、気兼ねなく自分らしきを出し、リーダーシップを取ることにもできる。しかし、力一杯活動することは少なく、受け身的に無難に事を過ごそうとする傾向が強い。

青年期にあるM男にとって、目的意識を持って力一杯活動に取り組み、その結果、心から充実感や達成感を味わうという経験は最も必要なことである。受け身ではなく、主体的に活動し最後まで責任を持ってやり抜く態度は、社会生活を営む上でも大切である。残り少ない高校生活の中で、このような経験をできるだけ多く積むことが、M男が今の生活を充実感を持って楽しむことにつながるとともに、将来の生活をも楽しむための基盤作りになると考える。

自分自身を見つめて、自分の行動に価値を見いだして自信と責任を持って物事に取り組もうとしつつあるM男の姿について述べてみたい。

## 1 プロフィール

### (1) 生育歴

- ・昭和56年 2月25日生 16歳10か月 高等部 2年 男子 てんかん
- ・平成 8年 4月 本校中学部より入学

### (2) 諸検査による実態

- ・知能検査

WISC-R IQ42

田中ビネー式 8歳 0か月

表-8 S-M社会生活能力検査

身辺自立	移 動	作 業	意思交換	集団参加	自己統制
11-6	12-0	12-0	9-0	12-6	13-0

- ・S-M社会生活能力検査 10歳 8か月

### (3) 行動特性

- ・善悪の判断が甘く、易きに流れる傾向があるが、指摘されると反省できる。
- ・ファッションや男女交際など興味を持って自分なりに楽しむが、友だち関係は広がりがなく、大人を相手に会話をしたがる。
- ・優しい気持ちで下級生に接し、適切な手助けをすることができるが、同級生に対しては時として乱暴な言葉使いをして口論することもある。

## 2 取り組みの構想

### (1) 指導仮説

M男は、「いわれるからする」「やってみるとまあまあできる」ことが多く、次につながる主体的な意欲や活力にならない。「何のためにするのか」「その結果どうなるのか」等、自分の行動に見通しや責任、そして楽しみを持って取り組み、力を出し切ってやり遂

げる喜びを味わわせたいと考えた。M男は、文字で表現することに苦手意識を持っているが、実際の生活の中で使う言葉、小学2年生程度の漢字の読み書きはだいたいできる。そこで、自分が書いた作文を手掛かりにして、自分自身を見つめる学習を積み上げていくことにした。書くことは必ず思考することでもある。考えることや作文を苦手とするM男にとっては、書くこと自体が自分自身を見つめる学習になる。苦手なことを克服しながらやり遂げる喜びを味わうことは、将来社会生活を営む上でM男を支える大きな力になると考える。

また、自分づくりの段階において「自己客観視」ができつつあるM男には、同等の立場で話したり受け入れたりし合える仲間が必要である。大人が場に応じたけじめのある態度でM男に接することは、M男に自分自身を見つめる目を育て、自分の行動に価値を見いだしていく手掛かりになる。回りの大人との人間関係もとても大切である。

そこで次のように目標を立てて指導にあたることにした。

《めざす「生活を楽しむ」像》	
◎自分の行動に見通しを持ち、最後までやり抜く喜びを持つ生徒	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・経験や知識に基づいた自分なりの考え方を持つ</li> <li>・目的意識を持って物事に取り組み、自己評価する</li> <li>・好きなことに没頭する活力を持つ</li> </ul>	題材選定のポイント <ul style="list-style-type: none"> <li>・「書く」ことを取り入れる</li> <li>・人との関わりを効果的に生かす</li> </ul>

## (2) 指導の方針

- 目的意識を明確に持たせることにより、活動する意欲や向上心を育てる。
- 自分なりの考えや工夫、判断をすることで、自己活動を促して責任感を高める。
- 努力の結果や成果を素直に認めて、充実感や達成感を味わうことにより、現在の生活に楽しみを見いださせる。

## (3) 具体的な手立て《支援の工夫》

- けじめの必要な場面や正しい判断基準をきちんと教える。(教師が手本を示す)
- 生活年齢を考慮し友だち感覚で受け入れる場面を作る。
- 満足感や納得・理解、人の役に立つ喜び等を味わわせるように、賞賛や評価(人と比べるのではなく)は具体的に示す。

《具体項目》	《留意事項》
<ul style="list-style-type: none"> <li>・心～素直に謝る、ごまかさない、等</li> <li>・技術～道具の使い方、等</li> <li>・姿～おしゃれ、礼儀作法、等</li> <li>・言葉～場に適した言葉づかい、冗談、等</li> <li>・態度～粘り、責任感、やる気、等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共感、同調～いっしょに歩む態度で接する。</li> <li>・指導～タイムリーに、場を絞って行う。</li> </ul>

## 3 指導の実際

### (1) 生活一般(自分史作りを通して)

#### ① 題材について

本題材「自分史作り」では、自分自身の生まれてから死ぬまでを事実と予想を交えて具

体的にとらえることにより、自分の存在や人生の価値を大切に思う気持ちを持つことをねらったものである。「現在」「過去」「未来」という時間的空間をとらえることは、自分の行動に見通しを持つという点において必要なことである。

また、生活一般の主たる内容としている進路・同和教育・性教育に関わるそれぞれのねらいは次のように考えた。

◎進路～誰もが自分の道を一生懸命に歩いてきたことを知るとともに、自分にふさわしいこれからの道を探すことの必要性を知る。

◎同和教育～自分の命や人生を大切に思うとともに、人の命や人生も大切に思う気持ちを育てる。

◎性教育～命の誕生や家族の愛情や支えについて知り、自分の心や体を大切にしようとするとともに、相手の心や体もいたわろうとする態度を養う。

自分史は、写真、自分や家族の思い出メモ、カットなどの資料を年表に一人ひとりがまとめていく。自分の過去を振り返ったり、現在を見つめたりすることで、そのときどんな気持ちだったか、なぜそんなことをしたのかなど、自分自身の行動について考えることを大切に扱った。絵や文に表すことで自分の内面に少しでも気づかせたいと考えた。

また、未来については、現実にも迫る卒業後の自分の進路について考えるとともに、少し先の未来に期待や楽しみを持って生活しようとする前向きな姿勢を育てたいと考えた。

## ② 支援の工夫とM男の変容について

M男にとっては、一番苦手とする絵や文で表現することや、思い出さなければならないことが多い学習なので、かなり抵抗を示し、四苦八苦しながら資料作りをした。「勉強より働くほうがいい」とぼやく声も聞かれた。写真のパソコン印刷や表作りなど、M男の得意な作業的内容を多く取り入れながら、見通しを持って最後までやり抜く喜びが持てるような学習の組み立てを工夫した。M男の様子について学習の流れに沿ってまとめてみた。

学 習 活 動	支 援	M 男 の 様 子
1.「自分史」の意味を知る。  2. 自分史の表と資料を作る。 ・誕生(生まれる) ・幼児の頃 ・保育園、幼稚園の頃 ・小学生の頃 ・中学生の頃 ・高校生の頃 ・卒業してから ・死ぬとき ※文とカット(自分で思い出して) 写真(家に備わっている)	1.「自分史とは、自分の歴史である」ということ、生まれてから死ぬまでが人の一生であることを教えた。 2. 過去を思い出して覚えていることや楽しかったことを書き出すメモを用意した。 ・短い文でよい、内容はなんでもよいという条件で、自由に書くように声かけした。 ・少なくとも一枚は書くという約束をして、自分なりに納得して選んだ場面を文にすることを意識させた。 (文や絵を上手に観ることより、どの場面を選ぶか)	1. 過去、現在、将来という言葉を使った。「生まれた」「将来は働く」ということはよく理解できた。「死」についてはまだ現実感がないようだった。 2. “記憶”することが苦手という意識があるM男は、時間をかけて思い出していた。小学校、高等部、中学部 幼児の頃、誕生の順に資料を作った。 ・カットは、「絵は苦手だ」とつぶやきながら何度も描き直しをしていた。「いいよ」とほめても、「気に入らない」と言って握りつぶした。納得いくまでやろうとする姿勢が伺えた。 ・誕生の時のカットが描けないと言って悩んでいた。できるだけ自分でイ



自分史を作っている M男

### 3. 年表にして資料を貼る。

- ・集めた資料を誕生から時の流れに従って、順序よく並べる

ということの方を重視した→内面をつかため  
よって、文や絵についての評価はしない)

- ・失敗してもよいように、メモ用紙等の用意を十分にしておいて気がねなく文や絵に取り組めるようにした。
  - ・カットは自分のイメージと想像力を大切にしておいて写真は参考にしなかった。写真は後で照らし合わせた。
  - ・将来への希望をふくらませるような声かけを多くした。
- ### 3. 手本（パターン）を提示して、参考にしながら自分なりに工夫をして構成するように促した。
- ・自分の作品という意識を高めるため、援助は控えた。

- メージして描かせたかったが、何枚も描いては破いた。友だちのを参考にさせたが、結局気にいらなかった。
- ・「三人目の子で忙しくて写真を撮っていない。兄とそっくりだったので兄の写真を持たせる」という母親のメッセージメモと写真を持って来た。写真を見ても誕生のカットが描けなかった。
  - ・卒業してからは「働く、結婚する」という希望を具体的に持っていた。学級全体での学習で深めていきたい。
  - ・先にできた友だちの作品を参考にしておいて自分が気に入るように構成した。
  - ・生年月日や学校名等よく覚えていた。漢字が分からない時は、教師に聞いたり友だちのを見たりして確認した。
  - ・「あっさりとお上げた」と自己評価していた。

## (2) その他（人との関わりや場の設定を大切にしておいて）

「現場実習」や「障害者技能・作業競技大会」など、学校外での人との関わりや実際に働く経験は、M男にとって大きく成長する場である。社会のいろいろな人の考え方に触れたり、現実の厳しさに直面したりする貴重な学習の機会である。また、一方で「もしかしたら自分にもできるかもしれない」と自信や意欲を持つこともできる。学んだことは、必ず感想文や反省文にまとめ、成長の足跡として残すようにした。作文や手紙に頭をなやませながらも大切なことを思い出そうと真剣に紙に向かっているM男の姿には、充実感が感じられる。

自分自身の努力で得た信頼を守っていこうとする緊張感や仕事をやり遂げた満足感は、真に働く喜びを味わわせてM男を成長させた。実際の社会でいろいろなことに挑戦する機会をできるだけ多く作りたいと考えている。

## 4 反省と今後の課題

教師との会話を通して自分の思いに気づいたり、教師の言葉の中から自分の思いを表すのに適切な言葉を見つけたりすることで、自分の内面を探ることが少しずつできるようになった。「苦手だ」と言いながらも一つの資料に納得いくまで取り組む姿が見られた。また、多くの失敗をした小学校・本校中学部時代については「先生、書きたくないこともある」と素直に自分の気持ちを言った。自分を振り返り、そのことを認めて反省する機会にもなった。教師は客観的な第三者としてのよき先輩、アドバイザーとしてM男を見守り支援する立場を自覚し、M男の自己客観視の力をさらに高めるよう努めていきたい。

(田村洋子)